

知的な雑談は教師譲り



「人生の一部に歌舞伎がないより、あった方がいいと思ってくれる人が増えるとうれしい」と話すおくだ健太郎さん

切にする先生もいた。しかし方も好きだった。いつも「おまえたちの気持ちはわかる」と認めてくれたうえで、指導してくれたという。

歌舞伎の魅力を伝える活動をしている歌舞伎ソムリエのおくだ健太郎さん(51、1984年卒)は、どこか学校になじめなかった。だが、学校に居場所がないわけではない。学校にいられたのは、ゆったりと構えていた先生のおかげ」と振り返る。

卒業後は早稲田大学政治経済学部に入學。途中休學し、渡米する。アメリカでの生活から日本文化に強い関心を持つようになり、帰国後、歌舞伎に熱中。大学卒業後、音声で歌舞伎の解説をするイヤホンガイドの貸し出しスタッフとして、アルバイトを始めた。

現実が苦手でも、演劇は得意だった。小学5年生の学芸会でやった創作劇で主人公を務め、先生や保護者から大絶賛された。「初めて自分に自信が持てた瞬間だった」という。

受験が差し迫っている時期でも、太平洋戦争などにまつわる、教科書にはないエピソードを興味深く話してくれる先生がいた。「これから担う若者に知ってほしい」と思うことがあれば、授業を中断しても、知的な雑談や世間話を大

次第に解説する側の仕事に専念するようになり、全国各地で定期的な歌舞伎を解説する会を開催している。

東海でも、高校2年の学芸会の演劇で教育問題をテーマに脚本を書いた。このころには「東京で演劇に関わる仕事をしたい」と心に決めていた。大学に行かず、演劇を学びたいと父親に打ち明けたが、猛反対される。相当な話し合いの結果、東京に行くために大学へ進むことにした。受験まであと3ヵ月。死にものぐるいで勉強し、早稲田大学文学部に入學した。

「皆さんを前に話すとき、東海の先生たちのように、知的な雑談や世間話を大切にしています」

ハイテンションな芸風

大学では演劇研究会に所属し、演劇に熱中した。そのまま劇団に入り、現在はフリーで、国内外でコメディを披露し続けている。海外へも目を向けたのは、自分にしかできないことを見つけたからだったからだ。「表現者としてのびしろをもっと広げたい」(浴野朝香)



海外をメインに活動していた時期もあったが、東日本大震災を機に、気持ちで日本に戻ったという清水宏さん

「表現者としてのびしろをもっと広げたい」(浴野朝香)